

4 領域の考え方

（前略）このような状況の中でもうひとつ重要なことは昭和50年の全道事務研千歳大会で故持田栄一氏が「教育としての学校事務を問い返す」との演題で「教育とは何か、学校とは何か」を含めて講演をし、私たちにとって、これからの学校事務を考えていく上で極めて重要な示唆を与えてくれました。それまでは五項目をやること、やれることが学校事務職員であると考え、個々の学校の中で仕事を拾い出し、それを自分だけの仕事として囲っていました。これではいけないと気づき、教育に理念があるなら学校事務にも理念を持たせようと新しい学校事務を模索する動きが現れました。

この動きは学校現場の具体的な実践の中から学校事務をとらえ返し、学校教育の主人公である子どもの教育を受ける権利を保障したり、学校の目的なり学校教育の目標を達成するために学校事務職員が主体的に担う仕事の領域を「学校財政、教育財政の確立」と「事務的情報の収集、理解と活用及び伝達」（学校事務労働の展開と運動第1集）の2つに大きく集約できるとしました。これがいわゆる領域といわれるもので、その後、この2つは「学校財政、財務の確立」と表現されたり、「事務的情報」が、「教育情報機能の確立」や「学校事務機能の改善」などと変化しています。それは必ずしも全道的に統一されていませんが、ここで、今まで各地から出されてきた「2つの領域」を整理しますと次のように要約することができます。

(1) 財政

学校教育に必要な予算を調査し、学校における財政執行を企画し、行政に対する要求活動を含めた子どもの学習に必要な全ての経済的活動である。今までのように単に監査に耐えるために処理されていた市町村経理ではなく、学校内外のいろいろな組織とのかかわりの中で調査し、検討、展開していく活動である。

(2) 情報

学校教育や教職員を取り巻く情勢や制度的な変化などの情報を収集し、内容を把握し、伝達、活用を考えていく活動である。その収集は、単に行政からの文書にとどまらず学校内の各係間で生まれるものや学校外からのものを含めてすべてを対象とした活動で、その活動は常に学校の諸活動と有機的にかかわっていかなくてはならない。